千刈狸の呟き

～ オペラは楽しい ～

アナログ狸

アナログ狸はワグネリアンである。しかも、全曲と称する余人には苦痛としか感じられない、長大な曲を愛する。この厄介な性は、たまたまFMで聞いた、バイロイト音楽祭のパルジファル、ホルスト・シュタイン指揮を聞いたときから始まった。

それまでは、オペラなんぞ、ハイライトのアリアぐらいしか聞いたことがなかったのに、本当に打ちのめされてしまった。またこれが聞きたいと、LPレコードを探して、ハンス・クナッパーツブッシュ指揮のバイロイト音楽祭のを見つけてしまった。

悪魔に魅入られたとしか言いようがない。もう止まらない、オペラは全曲でなければならない！そうとしか考えられなくなり、狂信的なワグネリアン、オペラ全曲至上主義者の誕生である。

その当時、日本にはオペラ専用の劇場などはなく、他国のオペラ劇場の引越公演くらいしか、オペラ鑑賞の手段はなかった。一番最初に生でオペラを見たのは、オットマール・スイトナー指揮ベルリン国立歌劇場のモーツアルトの魔笛であった。実際に舞台を目の前で見るのと、録音されたものを聞くのとは、まるで別物だ。舞台との一体感、生の歌声、演奏の響き、まさに天上の音楽だ。

今までのオペラ体験で特に忘れられないのは、カルロス・クライバー指揮ミラノ・オペラ座のオテロだ。開演前にオーケストラ・ブースを見学しに行くと、指揮者用のスコアの最初のページが開かれ、その上に一輪のバラが置いてあった。いよいよ開演となり、カルロス・クライバーが出てくると、そのバラを横にどけて、スコアをパタリと閉じて、いきなり指揮棒を振り始めた。その当時、日本ではオペラの経験が少なく、幕が閉まると音楽がまだ響いているのに、拍手する無粋なものが多かった。ところが、その公演では最終幕が始まる前に、幕が下りても音楽は続いているので、拍手は音楽が終わってからしてください、というアナウンスがあり、そのアナウンスが終わると、一斉にそのアナウンスに対する拍手が巻き起こった。当然アナログ狸も熱烈に拍手してしまった。最終幕で幕が閉まっても、拍手は出ず、音楽の余韻が終わった瞬間に会場中に大きなため息が広がり、次の瞬間に一斉に盛大な拍手が鳴り響いた。公演の帰り道でアナログ狸は無上の喜びを噛みしめるのであった。

カルロス・クライバーは、戦前の大指揮者エーリッヒ・クライバーの息子で、ナチスと大喧嘩した父親と南アメリカに移住したときに、カールから、ラテン語系のカルロスに名前を変えている。父親の残した膨大な楽譜を基にした、楽譜を公演前に印刷させて、楽団にくばり、それをもとに演奏している。その楽譜の印刷が間に合わない、という理由でベルリン・フィルとの公演をキャンセルしたり、ヨーロッパでは、指揮棒を振りだす前までは、カルロス・クライバーが指揮するとは限らない、と無類のキャンセル魔で知られていた。それでも一度演奏すれば、すべて名演と決まっていた。日本は大好きだったらしく、キャンセルはあまりなかった。

狂信者アナログ狸の経験だけでは、一般的ではないと考えられる。アナログ狸はワーグナーの指輪全曲の日本初演に参加すべく、前夜のラインの黄金の切符を手に入れたのであったが、仕事の都合上、行けなくなってしまった。余った切符をどうするか？と思案していたところ、親父狸が、行きたいと名乗りを上げた。浅草オペラに通っていた剛の者であるお袋狸を押しのけて、クラシック音楽など、ほとんど興味のないはずの親父殿の大音声。勢いに押されて譲ってしまった。如何になりしかと、感想を聞いてみれば、途中で幕間の休憩があると思っていたが、そのまま全部終わってしまった（ラインの黄金は、３時間近いぶっ通しの一幕ものです）、とぞ、のたまいける。しかも、面白かったから、券が余ったら、またよこせと、言うは常ならず。かくして、生涯にラインの黄金をただ一度聞き給える、親父狸はいとおかし。

また女房狸あり。映画、ミュージカル、コンサートいずれも、途中で眠りこけるものなり。しかし、トゥーランドットのオペラのみは、イナバウアーの"誰も寝てはならぬ"のせいか、最初から最後まで観てにけり。オペラの魔力とは斯くのごとく、各々方も魂を奪われぬよう油断めされるな。